おーい どんげだね!!

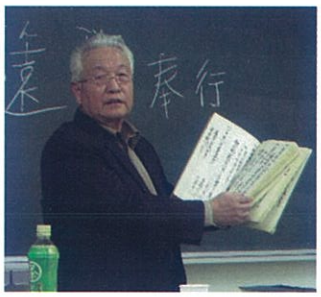
後世に先人の苦労を伝え、地域の活性化につとめたい

万代コミ協だより第10号
2013年 3月25日
万代地域コミュニティ協議会
発行者：丸山 健一
新潟市中央区東大通2－11－25

三社神社に仕えて五十年

宮司 大橋 毅

人には誰にも故郷が有ります。私にとってかけがえのない故郷は流作場であります。この土地に生をうけて生涯鎮守の宮司として仕える事が私に課せられた天命と思っています。



然しこれまで50余年の勤めを顧みて、なかなか厳しい環境のもとでの勤めでありました。

昭和39年6月16日昼過ぎ突然大地が鳴動し、大波のうねりの如く突き上げ、突き落とす上下動に続いて、激しい横揺れ、家鳴り震動して一瞬にしてこれまでの生活を一変させる新潟大地震の発生でした。私は家に居て大きな柱が天井板の捩れと共に、40㎝も左右に傾きバラバラと天裏のゴミが頭上に降るのを見ました。揺れが始まると同時に電気の安全器を落とし、ガスの元栓を閉めて外へ避難しました。

私は昭和35年宮城県塩釜でチリ地震の津波を経験していたのですぐに津波の事を予測して、神社の戸締りをして大事な物を高い処に移して、流出を防ぐことにしました。ラジオは津波の襲来を繰り返し伝え、市民の避難を促していました。

昔から新潟に津波はないという全く誤った伝説がありました。高い所へ避難というよりは、津波のよせてくる信濃川の方向へ歩いている人たちが多くいました。その人たちを宮浦中学校の屋上へ避難誘導しました。地上は地下水の噴出で液状化して足をとられる状況でした。艫（やがて）地上2mの津波が押し寄せて、周辺は真っ黒な濁流の渦に呑み込まれました。東北の大津波程のことではないが家の中には150㎝以上の高さで水が流れ、家財道具を押し流しました。夜になると炎上した昭和石油のタンクが次々に爆発して、燃え盛る大きな炎が避難している人たちの不安をかきたてました。地震騒ぎも時を経て終息し、人々の心にも復興の意欲が芽生えてきました。私は今、この災害で大被害をうけた神社の復興に取り組んだ45年の歳月を顧みて、樹齢300年の松をはじめ、多くの樹木を失い、流出した歴史的文物について生涯忘れられない思いがあります。災い転じて福となす思いで、神社の復興は地域の復興に繋がる、との信念で神社役員と共に懸命に勤めました

その一環として昭和61年当地開拓240年記念と、震災復興を感謝して神輿をつくり、例年秋祭りに氏子内を巡幸して発展を祈り、更に平成8年9月開拓250年祭を斎行して、4年後に流作場250年誌を上梓しました。微かに歴史の断片を綴った物ですが、後世に先人の苦労を伝え、現在すすめられている地域の活性化に資するところあれば幸いに思います。

今回の「流作場どっと萬代」冊子発行にあたり資料提供など多大なご協力いただきました。大橋氏は現在保護司としても活躍されています。

3月1日流作場どっと萬代講演会「維新以後の流作場」を受講する参加者の皆さん
講師：三社神社宮司　大橋　毅

流作場どっと萬代
おいたちを温ねて明日への飛躍

冊子発刊によせて

万代地域コミュニティ協議会
会長　丸山　健一

最近では公民館や文化・カルチャーセンターでも地域歴史文化講座が盛んです。小学校では萬代橋や信濃川についての総合学習に取り組み、中学校では課外活動として観光ボランティア地域紹介を行っております。

流作場委員会では、今年度事業として、地域の方々が「まち」の歴史にふれて、楽しみ、もっともっと地域を身近に感じていただけることをテーマとしました。わかりやすく地域の歴史について紐解き、次の世代に引き継げる「よもやま話」等も集め、歴史の共有をめざす事業の一つとして冊子を発刊いたしましたのでご一読下さい。

（お申し込みは裏面）

右は新潟日報本社
メディアシップ

三社神社本殿と流作場開拓者：安倍玄的屋敷跡（左手白い建物の上、今はコンビニの駐車場、かつては広大な森があった）

流作場どっと萬代講演会

流作場のおいたち

第1回　流作場開拓者5人の略伝

講師　三社神社　大橋　毅　氏

附寄島絵図、附寄島開発について新潟、沼垂の意義、長岡藩庁から新潟町へ提示された条件（12ヶ条）附寄島開拓請負人（安倍玄的、近江屋曽平、寺山幸助、中倉源兵衛、関川助市）5人ですが、様々の事情でそれぞれ棄権した方もおりました。が、最後まで開拓に残って尽力したのが安倍玄的でした。安倍玄的が開拓を手がけたのは齢85歳、完了したのが89歳でした。三和町の屋敷跡は現在コンビニになっています。

主催：流作場委員会

平成25年3月19日コミセン2F当日は34名の方々が熱心に受講されました。

第2回　流作場の歴史

講師　新潟市歴史文化課学芸員

新潟市さわやかトーク宅配便事業として

長谷川　伸　氏

みなとまち新潟の歴史のおもしろさ、「流作場登場以前」～信濃川・阿賀野川がつくった「新潟」の地の歴史、江戸時代の新潟町と沼垂町、流作場の形成、戦後の流作場：新潟駅周辺の変貌、流作場新田の歴史、近代的港湾都市への変貌：新潟市を支える変貌

第3回　維新以後の流作場

講師　三社神社　大橋　毅　氏

明治戊辰の役と流作場、蒲原校開校、市町村制の実施、新沼合併、新潟・沼垂合併条件（明治22年流作場、蒲原、長嶺3ヶ村は沼垂町と合併、その後大正3年新潟市流作場〇〇町〇〇番地ノ〇〇と表示することになった。

切り取り線

講演会参加者用　冊子引替券

講演会に参加した方へ
この券と引替に3月20日以降お渡しします。

御名前記入欄

引換所　丸田（天明町自治会長）・田所（万代中央田所ハウジング）
竹石（東万代町竹石網店）・丸山（東大通みなと人形）にてお渡しします。

冊子希望の方は流作場委員会へ申し出ください。引換の際の住所氏名記載は委員会で今後案内をさせていただくこともあります。

わが町内

天明町自治会　丸田　喜也

わが天明町は古信濃川に面し、西側に広がる約４００世帯余を有する大所帯の自治会です。新潟市が合併により区制になる前の昭和43年に六あった町内会が一緒になった。名称が天明町にかわると同時に、一区から六区に分けられました。

「天明町」の町名の由来は江戸時代の天明年間の開拓に起源するといわれています。町内の行事として、昔から毎年小学校に入学する児童に交通安全・健康を祈願する入学祭を三社神社で行っている。また高齢者の憩いの場として町内の会館で毎月テーマを決め、多才な内容で「お茶の間」を開催している。高齢化が進む町内、若者の流出を防ぐ名案はないものか・・・

地域の茶の間　”お茶の間てんめい”

地域の高齢者の方々が引きこもらないよう、毎月１回定期的に天明会館にて開催しています。そのひとつとして平成24年9月、信濃川ウォーターシャトルに乗って、ふるさと村まで行きました。　ふるさと村船着場でのスナップ

編集後記　第10号発行して

会報を発行して10号となりました。未熟さを克服できず、行き届いた会報ができない。もどかしさ、時間、スタッフ。嘆いているうちに、また発行の時期となってしまった。スタッフがほしい。

広報委員長：田所　暁雄

みやの万代ぶつぶつ――中央区自治協議会委員

さよならだけが人生さ。別れることは切なく苦しい。今までどれほどのさよならがあったやら。そう、別れの季節がやって来た。「別れは終わりでなく、始まりだ」と思うことだ。この３月で中央区自治協議会の任期満了を迎える。自治協議会が設立され、さらに地域コミュニティ協議会が中央区に２３地域に設置された。いずれも住民自治の実現をめざすものとされている。先ほど市は自治協、コミ協から意見を募集したところ、概ね「自治協、コミ協の役割や位置づけについて議論を深める必要がある」との意見であった。現在の中央区の自治体制は　①町内会・自治会　②地域コミ協・区自治協　③行政に分けられる。これからの課題としては、要は「共働の関係をどのようにしてつくりあげていくかということだ。」

宮川　善徳